

「両義的遺産」としての共産主義遺産 —チェコ・ポーランドにおけるスターリン様式建築を中心に—¹⁾

An Essay on the Communist Heritage as an “Ambivalent Heritage” —With a Special Reference to Stalinist-style Architectures in Czech and Poland

四方田 雅史

文化政策学部文化政策学科

Masafumi YOMODA

Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

「共産主義遺産」は中東欧において社会主義時代が残した文化財のことであるが、同時代には独裁やソ連の支配といった否定的なイメージ・感情がつきまどってきた。そのため、その「遺産」は、負の遺産か、そこまでのいかなくとも論争的な遺産、両義的な遺産とみなされ、その保全・観光資源化について議論の対象となってきた。本論文では、それが伴うさまざまな課題とともに、それらが遺産化・観光資源化されている現状の背景について探る。具体的には、特にスターリン体制と不即不離にあるスターリン様式の集合住宅地区ポルバ（チェコ）などを主な例として、外国人観光客にとって異質な体験が可能な場としての視点があり、現地国民から見ると独裁時代の遺産と否定的に感じる一方で、土着文化を援用した装飾など、伝統との連続性に遺産の意義を見出す視点が登場していることを論じる。

The “communist heritages” are defined as relics in Eastern Europe from the socialist period which are regarded to be preserved. But the period has been generally considered by Czech and Polish as that of dictatorship and Soviet compulsory rule, giving rise to their negative, or at least ambivalent, feelings. Therefore, whether communist heritages should be preserved or not remains controversial. This paper takes mainly Poruba which lies in the suburbs of Ostrava, Czech, as an example, and shows that foreign tourists have come to regard it as a tourist attraction, because it is a town of Stalinist-style mass housing where they can have experiences different from those in their native countries. In addition, the fact that socialist realism partially adopted indigenous culture has helped Czech look upon Poruba as a national heritage to be preserved.

はじめに

20 世紀後半は、「文化財のインフレ」とでも呼べるくらい、文化財（ヘリテージ）の範囲が拡大しいろいろなものが文化財とみなされるようになった時代である。その一例として、世界文化遺産の範囲が、産業遺産や文化的景観と並んで、後述する 20 世紀の建造物、および「負の遺産」にまで拡大されてきたことが挙げられよう。

本稿では、そのような拡大を象徴する事例として、中東欧に点在する共産主義遺産（communist heritages²⁾）に焦点を当てる。現実の社会主義体制はまだ同時代的な現象であり、ベルリンの壁崩壊後、その時代が否定されている国も多い。そのため、その体制が残してきたものを文化財として保存すべきか否かについては議論がある。その意味で、共産主義遺産は「負の遺産」であるか、そこまで言わなくとも、後述する不協和音をもたらす遺産、または議論を呼び起こす遺産であると言うことができよう。

共産主義遺産を取り巻くこのような変化は、それを文化財とみなすようになるまなざしの変化をも示している。現在「文化財」や「遺産」と呼ばれているものが、もともとそうみなされてきたわけではない。Tunbridge らが指摘するように、遺産（文化財）はありのままの「過去」とは異なり、どの国でも多様な「過去」の中から取捨選択しつつ「歴史」が形成され、その「歴史」観に基づいて「遺産」が選択され保全されていくという経緯をたどる。よって、ある遺産を保全すべきという意識・観念はその国で支配的な歴史観に支えられていると言える³⁾。他方で、同じく Tunbridge が指摘したように、経済的側面も無視すること

はできない。遺産産業化という世界的趨勢の中で、遺産が経済事情から選択される面も否めない。たとえば観光客を集められる（誘致したい）ために、文化財が選択され保全されることも不可避なことであろう⁴⁾。現に遺産観光も多様化し、観光のニッチ市場として共産主義遺産を活用した共産主義遺産観光（communist heritage tourism）も盛んになっている⁵⁾。そこには、当該遺産に対する国民と外国人観光客の間にあるまなざしの違いも見取れる⁶⁾。

具体的には、共産主義遺産の例として、現に文化財となっているオストラヴァ（チェコ）郊外のポルバ（Poruba）地区、ワルシャワ（ポーランド）の文化科学宮殿やプラハの現クラウン・プラザ・ホテルなどを取り上げたい。後述するように、これらはすべてスターリン時代の遺産である。社会主義時代の中でとりわけスターリン時代は、評価の分かれる時期である。本稿で取り上げる共産主義遺産は、建設されてから半世紀しか経っておらず、多くの人々にとって日常的存在でもある。それを文化財や遺産とみなすようになる変化は現在進行中のプロセスである。本稿では、このような建築を遺産化、観光資源化するに至った歴史的、社会的背景に着目して検討したい。

1. 共産主義遺産をめぐる 2 つの背景 — 「不協和音をもたらす遺産」と 20 世紀の建築と

かつて拙稿において、ポーランド・チェコの産業遺産の現状を概観し、産業遺産の保全や利活用、観光資源化は、旧東欧諸国の「西欧化」、少なくとも「中欧化」という流れの中に位置づけられること、および第一次大戦後の独立

期のみならず、19世紀以降のドイツ（プロイセン）・オーストリア統治時代がむしろ肯定的に捉えられていた一方、ナチ占領期や社会主義期の痕跡は消されるか、それに近い状況になっていることなどを指摘した⁷⁾。ポーランドもチェコも、ロシア、ドイツ（プロイセン）、オーストリアといった当時の大国に挟まれた中で、一国で完結する近代史を語りにくいことが背景としてある。そこでは、近代化を誇りにしにくい事情が影を落とし、国民単位の世界史と矛盾や摩擦を引き起こすことが考えられる⁸⁾。

その反面、ポーランドやチェコが完全に西欧の一員とみなされたとも言いがたい。特に外国からの眼には、ポーランドやチェコには旧東欧、すなわち旧社会主義圏としてのイメージが依然として残っていることも確かであろう。本稿で取り上げる共産主義遺産は、2つの意味で旧来の文化財概念を拡張する動きと呼応している。第一に、これを生みだした共産主義時代は、中東欧各国国民にとって負の歴史であるか、少なくとも国民の間に不協和音をもたらす歴史であり、その遺産は負の遺産、もしくは不協和音をもたらす遺産である点である。第二に、それらが20世紀の建造物である点である。以下に見るように、この2つはともに旧来の文化財概念が想定していなかった問題を生んでいるのである。

(1) 社会主義時代評価の問題

社会主義時代は、独裁、抑圧、経済停滞、半植民地といった負のイメージを帯びている⁹⁾。他方で、近年、「オスタルギー（Ost [東] + Nostalgie [ノスタルジー] = Ostalgie）」と呼ばれる社会主義懐古の意識も起きている¹⁰⁾。その意味で共産主義遺産は、「負の遺産」とまでは言えなくとも、「論争的な遺産（controversial heritage）」、もしくは「不協和音をもたらす遺産（dissonant heritage¹¹⁾）」と呼ぶことができよう。

これまで文化財は国民の栄光や誇りを体現したものを指定・登録し保存するのが一般的であった。しかし、近年では負の歴史や、複数の歴史観の間のジレンマを体現したものにまで文化財の範囲が拡張されてきた。その意味では、近代国民国家が自明のこととしてきたその国にとっての「正統」な歴史観・文化財観に対するアンチ・テーゼにもなっている。現に世界文化遺産でアウシュヴィッツ・ビルケナウ収容所や原爆ドーム、アパルトヘイトの黒人弾圧を象徴するロベン島などの「負の遺産」も対象となってきたことは周知のことであろう。

そもそも近現代史自体、大国による帝国主義や侵略の歴史と不即不離の関係にある。たとえばアジアの近代史は侵略や植民地主義と切り離して理解することはできず、ゆえに侵略国・宗主国の影響を無視し得ない産業遺産や近現代建築¹²⁾に対する評価は両義的にならざるを得ない¹³⁾。本稿で取り上げている中東欧の共産主義遺産を検討する場合も、1945年以降の社会主義化、ソ連の実質的支配の歴史をどう評価するか、国民にとってアンビバレントな感情を伴わざるを得ないと言えよう。

まして、19~20世紀に進行した近代化・西欧化の流れが社会主義時代に途切れ、それに逆行する現象すら呈している。その1つがモダニズムを否定して登場するスターリン様式である。それは、欧米の基準から見た「正統」な建築史に

よれば、あだ花、もしくはその経路から逸脱した存在にも見える¹⁴⁾。「正統」なモダニズム建築に共産主義建築も含んでよいのであろうか。もしくは、そうした地域的変異を含め、モダニズムや近現代建築と呼ぶべきなのであろうか。これは、後述するモダニズム建築の評価が、欧米・日本以外に範囲を広げていく際、考慮されなければならない課題も先取りしている。

(2) 20世紀建築に対する評価

上記の「不協和音をもたらす遺産」をどう扱うかという課題にくわえ、20世紀建築に対する評価の問題もある。もともと20世紀建築については、建設時期が現在からそう離れていないため、歴史的評価がまだ困難な状況にある¹⁵⁾。そのため、専門家が保存すべきと考えた建築が、世論からの支持を得られず、破壊されたり放置されたりする事態が頻発している¹⁶⁾。すなわち、我々にとって20世紀はまだあまりに日常的であるために、保存すべきとみなす世論が弱かったのが実情である。この点は近年改善されつつあるものの、現在でも専門家と世論との間にズレがあることは確かであろう¹⁷⁾。

文化財を経済学の視点から捉えると、現世代のみならず、将来世代の便益も考慮しなければならない。しかし、将来世代の便益を現世代の私たちが評価することは現実には難しい。なぜなら、現世代の費用・便益よりも将来世代の費用・便益のほうが理念的であるからであり、そのため、次善の策として専門家による評価が不可欠になるのである¹⁸⁾。さらに、文化財としての社会的価値を認識することから、その価値を認識する人が多くなるにつれて、名声や評判、社会的価値も高まるという「ネットワーク外部性」が起きやすい¹⁹⁾。よって、ある閾値を超えれば、国民の多くが文化財としての価値を強く認識するようになり、保全もされやすくなるという関係にある。

この代表的事例として、現時点で国民は文化財とみなさないにもかかわらず将来世代からは評価され得るもの、たとえばモダニズム建築が挙げられよう。江戸時代以前に起源をもつ文化財のように、現世代と将来世代ともに文化財とみなすと考えられるようなものでは、すでに歴史的評価が定まっているため、現世代の評価を将来世代の評価と近似してもさほど問題はないであろう。しかし、時代が現代に近づくほど、現世代が文化財とみなさないものを将来世代が文化財とみなす可能性が出てくる。先の「ネットワーク外部性」によって、現世代はまだ価値を充分認識していないものの、将来世代が高く評価するようになる文化財も存在しよう。そのため、専門家のリスク回避志向から文化財を過剰に選択するバイアスはあるものの、専門家が文化財になりそうな物件を事前に選択する必要性が生じてくる。しかし、20世紀の建築は、現在、実際に居住していたり利用されていたりする場合も多く、専門家の間では文化財的価値が評価されているにも関わらず、利活用している一般国民や企業は利便性や新規性を求め、保存を拒むケースもある。このように、20世紀の建築群は、専門家と一般国民の間で齟齬が生じやすい領域なのである。

現に専門家の間では、近代建築の記録・保存を目的として、1988年に DoCoMoMo (International Working Party for Documentation and Conservation of

buildings, sites and neighborhoods of the Modern Movement) が設立され、各国で 20 世紀のモダニズム建築を保存する意義が認識されるようになった。また、世界遺産では、1994 年の「世界遺産一覧表における不均衡の是正及び代表性・信頼性の確保のためのグローバル・ストラテジー」の中で今後重視されるべき範疇に、「産業遺産」・「文化的景観」と並んで「20 世紀の建築」が挙げられている²⁰⁾。ブラジリアの都市計画やル・アブルの復興都市計画、テル・アヴィヴの白い街、シドニーのオペラハウスなどがその代表であろう。世界文化遺産登録の可否を審査する ICOMOS にも、2005 年に「20 世紀遺産に関する国際学術委員会 (International Scientific Committee on 20th-Century Heritage 以下 ISC20C)」が設けられ、その前後に 20 世紀の建造物が数多く世界文化遺産に登録されるようになった。日本国内でも東京中央郵便局をはじめとしてその保全を求める運動が近年相次いでおり、その保存・復原に向けた動きも活発になりつつある。このように、20 世紀の建造物までを保存対象とする動きが顕著になっており、それに合わせた取り組みも不可欠になっているのである。

(3) 小括

上記の 2 つの流れが交叉したところに共産主義遺産も位置づけられる。社会主義時代 (1945~89 年) は中東欧の国民にとって半植民地的状況に置かれた負の歴史であり、それが残した文化財も負の遺産であるか、少なくとも両義的である。このような特に毀誉相半ばする建築については、一般国民と専門家・評論家との間でさらに齟齬が生じやすく、保全されるべきか否かについて、絶え間ない議論が展開されてきたのである。

2. 20 世紀建築の中の共産主義遺産の位置 — その微妙な関係

(1) モダニズム建築・社会主義建築史からみた共産主義遺産

欧米の建築史を基準とすると、社会主義建築は正当に評価されにくい。DoCoMoMo も ICOMOS もモダニズム運動を代表する建築の保存を重視しているものの、そこから偏倚した建築については評価が分かれる。モダニズム建築は、普遍的とみなされる近代化の象徴であり、20 世紀の流れの一部として認識されるのに対し、そこから逸脱した建築はその流れに逆らう存在でもある。たとえば同じ社会主義国であったハンガリーでは、1970 年代にモダニズム建築への評価が高まっていたが、文化財選定の際に 1950 年までと期限を区切ったのは、スターリン時代の建築に対する評価の問題を回避しようとしたことが理由にあったと言う²¹⁾。すなわち、モダニズム建築とスターリン時代の建築は、性格上峻別されていたし、20 世紀建築をモダニズム建築とほぼ同義に扱う中で、スターリン時代の建築はその中からこぼれ落ちる可能性があったことも自然なことと言える。

独裁者の建築という意味では、社会主義建築も、ナチやファシストの建築をいかに位置づけるかと似た問題を孕んでいる。ナチ時代の建築とスターリン時代の建築には共通性があることも事実である²²⁾。これらは多様な文化や個人の創造性を抑圧する全体主義的な遺産である。そのため、

本来は反体制的・反伝統的なモダニズム建築とは相容れない。しかし、文化の多様性という基準から眺めると、その逸脱もある時代の反映であり、世界文化の多様性を物語っているという位置づけも可能である²³⁾。

このように共産主義遺産は毀誉相半ばする状況にあった。ISC20C のプロジェクトには、次のように書かれている。

「社会主義リアリズムを体現した場所の遺産としての認識が欠如していることに対応し、近年、ISC20C の欧州会員は、欧州のポスト社会主義国における戦後の 20 世紀遺産に関する一連の会議と研究を始めている。」

「このこと (議論を続け社会主義遺産の潜在的な重要性について考察すること: 引用者) には、国を超えた世界遺産リストのシリアル・ノミネーションの可能性 (potential) を考えるため、「社会主義遺産」を体現する場所を評価しリストアップし、ポスト社会主義諸国間ネットワークを通じて協力することにより、世界遺産登録の暫定リストを更新することが含まれよう。」²⁴⁾

同様の言説を、2012 年の ICOMOS シンポジウムにおける問題提起からも引用しよう。

「中東欧における社会主義の建築遺産の一部は、専門家によって記念物的価値を有するものであると考えられている。しかし、この価値はしばしば議論となっている。記念物と認められた特に重要な建物、複合体 (ensemble)、緑地が、1990 年以降数多く登録されるようになった。」

「1990 年ごろ、社会主義の建築遺産はほぼ例外なく不人気であったが、今やそれへの認識に違いが出てきている (differentiated)。その違いは、いわゆる社会主義リアリズムや社会主義モダニズムの建築が今日経験している評価に認められよう。」²⁵⁾

以上の言説によれば、文化財としての認識の欠如、その不人気さが問題視されている。他方で、少なくとも専門家の間では、共産主義遺産を保全する必要性が認識されてきたことも示している。いずれにせよ、ベルリンの壁崩壊から既に四半世紀が経ち、共産主義遺産の評価は揺れ動いてきたことは窺えよう。

ここで、社会主義建築の通史を俯瞰しながら、共産主義遺産の位置を見ておこう。ロシア革命当初は、構成主義や国際様式といったアヴァンギャルド建築が主流であり、新進気鋭の建築家にとって実験場となっていた²⁶⁾。これらの建築は前衛的で理想的すぎるためか、現在でも一般の人々には理解しがたく、ロシアでは消滅・改変の危機に直面している。それにもかかわらず、共産主義遺産の中でも初期のアヴァンギャルド建築は西欧建築史との結びつきが強く、そこから派生する運動として専門家から高く評価されている。現にモスクワの会議では、ICOMOS や DoCoMoMo が中心となって、ロシアのアヴァンギャルド建築をはじめとする近代建築の保全に努めるべきという内容の「モスクワ宣言 (Moscow Declaration on the Preservation of 20th-Century Cultural Heritage)」が発表されている²⁷⁾。同様に、欧州と連携しながら、モスクワの構成主義建築を保存・活用するモスコストラクト・

プロジェクトが進められたり、ラジオ電波塔であるシュホフ・タワーの保存を目的とするNPOが結成されたりするなど、アヴァンギャルド建築や構成主義建築に対する評価はロシアでも高まっている。

しかし、1930年代にスターリン体制が確立すると、このような前衛的実験は影をひそめ、社会主義リアリズム、いわゆるスターリン様式が主流になっていった。スターリン様式は別名、社会主義的古典主義 (Socialist Classicism)、社会主義的アンピール様式 (Socialist Empire-Style)、スターリン・ゴシック (Stalinist Gothic) などと呼ばれたように、これまでの古典主義、アンピール様式、ゴシック様式、そしてモダニズムが混然一体となった形式である。しかし、社会主義圏の建築がこうした建築に画一化された事実自体、当時、建築家の自由が失われ、建築そのものが政治化していた証拠である。その中で、第二次大戦を経て中東欧におけるソ連の支配が確立するにつれ、スターリン様式も中東欧に伝播していった。そこでは、東側の建築史が西欧建築史の流れから切り離され、民族主義的傾向や伝統的建築の模倣といった復古的側面が強まったのである。

しかし、先述した通り、ICOMOSやDoCoMoMoでは20世紀前半のモダニズム建築が保存すべき文化財として評価される一方、社会主義リアリズム建築への評価は、一部にはあるものの、スターリン体制への評価の揺らぎからいまだ低いのが現状である。合理性や機能に基づくモダニズム建築が、現在、オフィス、工場や住宅などへと広く普及したため、その先駆的建築を保全・保存すべきという声が大きくなっている一方で、社会主義リアリズム建築は体制と結びつき、体制の歴史的評価に合わせてその評価も揺れ動かざるを得ない存在である。しかし、以下で見ていくように、そのような遺産が現在脚光を浴びているという皮肉な結果をまねいている。次節では、チェコを事例に長期的スパンでそのことを俯瞰してみよう。

(2) チェコ建築史の中の共産主義遺産

次に、チェコの建築史にとって共産主義遺産がいかに位置づけられるのであろうか。DoCoMoMoのチェコ支部が作成した保存建築リストから、20世紀建築に対する評価を見て取ることができる。そこでは、主として戦間期のさまざまなモダニズム等の建築がリストアップされているが、社会主義時代のものは、1962-70年に建設されたレスナ (Lesná) の住宅・学校建築などしかない²⁸⁾。このように、やはりDoCoMoMoチェコ支部でも社会主義時代の建築はそれほど重視されていない。

チェコの世界文化遺産でも、中世の建築やその面影を残す歴史都市とともに、ブルノにあるトゥーゲントハット邸 (Tugendhat-Villa) が2001年に登録されている。これは近代建築の先駆者の一人であるミース・ファン・デル・ローエの設計による有名なモダニズム建築であり、DoCoMoMo運動の成果でもある。このように、戦間期のチェコはモダニズム建築の中心であったことが、独立期を象徴する事象として肯定的に評価されている²⁹⁾。このため、トゥーゲントハット邸は早くもスターリン批判後の1962年に国家記念物 (national monument) になり、科学に基づいた復原を行うための基金 (Tugendhat Villa

Fund) がビロード革命後の1993年に設立されている³⁰⁾。このように、その価値はスターリン批判後に認められ、社会主義崩壊後に再評価されるという経緯をたどっている。モダニズムの評価も政治変動に合わせ揺れ動き、特にスターリン様式の毀誉褒貶と相反していたことが分かる。

くわえて、チェコでは、長い歴史の中で建築の諸様式が重層的に積み重ねられていること自体がその国の誇りとみなされている。その代表として、チェコの首都プラハの建築を挙げよう。たとえば "Prague Architecture-Guide to Architecture in Prague" というウェブページによると、19世紀末以降に限っても、アール・ヌーヴォー、キュービズム、機能主義、1960年代の建築 (モダニズムの影響を受けたEXPO58に代表される)、ビロード革命後の建築と並んでおり、プラハはまさに建築史の博物館とでも喩えられよう (たとえば写真1)。それにくわえ、社会主義リアリズムに関する記載もあるにはある。しかし、たとえば「社会主義リアリズムという新たなスタイルは、スターリン・ソヴィエトの影響を受け、醜く傲慢である (ugly and arrogant)」と酷評し、スターリン批判で破壊された巨大なスターリン像についても、「ありがたいことに (thankfully) 撤去された」と皮肉たっぷりな物言いである。プラハで計画された社会主義的な都市改造についても、歴史に基づく議論によって撤回されるなど、社会主義時代の建築や都市計画に関して辛辣な記述が相次ぐ³¹⁾。プラハは1000年の歴史を有し、重層的に各時代の建築が蓄積されてきたことが市民の誇りである一方、社会主義時代はその景観や建築を劣化させ破壊した時代として非難の対象となっている。その意味で、社会主義リアリズムなどの共産主義遺産に関しては負の側面が殊更に強調されている。もちろん、このウェブのみから一般化することはできないとはいえ、それが国外から強制された様式であり、チェコの建築史にとっては、1945年以前の発展の流れが断絶しているという認識があることが読み取れる³²⁾。

ただし、興味深いのは、独裁者の権威や当時の体制の成果を誇示する建築が、現在、当該国のスカイラインを象徴する文化財になるとともに、“資本主義的”に利用されていることである。たとえばプラハでは現在クラウン・プラザ・ホテル (写真2) やヤルタ・ホテルになっている建築、ワルシャワの文化科学宮殿 (写真3) が中欧におけるスターリン様式の代表的建築と言える。ともにそれぞれの国で文化財になっており、前者2つは高級ホテルとして活用されているし、後者は博物館やコンサート・ホール、観光センターなどを収容している。このように、これらはもともとかつての独裁者を賛美する目的で建てられたという意味で不協和音をもたらす遺産であるものの、ホテルや文化施設として、当時の体制とは正反対に、いわば“資本主義的に”利用されるという逆説的な結果となっている。

これらは、専門家・一般国民・観光客との間の建築に対する評価の差異が顕著な例と言えよう。その一因としては、独裁者の権威を示すための建築や装飾は、威圧感、非日常感を引き起こす“装置”になっていることが挙げられる。モダニズムが理性や機能に訴える様式であったとすると、スターリン様式はかつての古典主義やゴシック、バロックと同様に伝統や感情に訴えるものである。資本主義自体が理性のみで動き得ないのと同様、スターリン様式は資本主

義社会でもその感情に訴えるものとして機能しているとも言える。もちろん、中東欧の人々にとって、理性ではこの威圧感や半植民地的な支配、独裁政治の象徴として認識されている一方³³⁾、外国人にとっては異質なものである。目に入る社会主義時代の象徴である。すなわち、観光において重視される異質性を体現した建築になっており、慣れ親しんだ本国とは異質な体験ができる場なのである。ワルシャワの文化科学宮殿に観光センターが設置されているのは、まさにその表れであろう。そして、独裁体制や独裁者の成果を殊更に誇示していたがゆえに、豪華で目に付き感情に訴える部分も多分にある建築として、観光に有効な装置となっている。理性面では独裁体制は忌まわしい記憶であるが、感情面では、それを誇示する建築群に威圧感や崇高さを感じざるを得ない仕掛けになっているのである。

ここにもアンビバレントな評価が共存している。その特徴は機能重視、伝統・装飾拒絶のモダニズム建築とは異質であるために、明らかにそれからの逸脱ではあるが、これらの建築を観光資源として位置づけられ始めている以上、国内外におけるこの矛盾した観点の間でどう折り合いをつけるかが問われているのである。

3. ポルバにみる社会主義的都市計画の保全と観光

その共産主義遺産の一例として、ポルバを取り上げて、実際に調査を行った。ポルバはチェコ共和国のオストラヴァ近郊にある衛星都市である。オストラヴァ市はオーストリア帝国時代から炭鉱・製鉄都市として栄え、「共和国の鉄の心臓」とも呼ばれるほどであった。そのため、社会主義時代には大量の労働者を必要とし、大量の労働者住宅も必要であった。ポルバもその必要性から生まれたベッドタウンであり、その意味で社会主義時代の産業遺産の一つとしても位置付けられる³⁴⁾。

ポルバは社会主義時代の1951年に建設が開始され、1950~60年代には約75,000人が住んでいた³⁵⁾。そのため、建築様式はスターリン時代の特徴を反映している。いわゆる社会主義リアリズム（チェコではSORELAと呼ばれた）である。同時期には、ポーランド・クラクフ近郊のノヴァ・フタ（Nowa Huta）など、同様の都市が労働者のために各地に建設された経緯があり、それらも共通した特徴を有している³⁶⁾。

ポルバは、オストラヴァの中心地からトラムで20分程度の距離にあり、社会主義的な都市計画思想に基づいて設計された居住都市である。オストラヴァの中心部は、戦前、ドイツ人など富裕層が住む地域であった³⁷⁾。そこに旧市街があり、19世紀末から20世紀初頭までのアール・ヌーヴォー建築やモダニズム建築などが点在している（写真4）。

このような中心部のイメージに対抗して、社会主義当局は郊外のポルバを社会主義の象徴として「資本主義に毒された」中心部から断絶させ、都市が持つ経路依存性（path dependency）を無視しようとした³⁸⁾。当時、ポルバは「新しいオストラヴァ（Nová Ostrava = New Ostrava）」と呼ばれ、製鉄業や炭鉱業が発展した中心部とは対照的に、労働者にとって健康的で衛生的な都市を企図した³⁹⁾。政権側は旧市街への投資に消極的であった一方、郊外のポルバなどへは積極的な投資を行い、労働者住宅を大量に供給す

ることを目指したのである。逆にピロード革命後は、むしろ中心部の再開発を進め、産業遺産の観光資源化、商業施設化を進めているが、それも社会主義時代の政策の裏返しであったとも言える。中心部の歴史的街区は社会主義時代には荒れ果てた状態になっていたが、21世紀に入ると再開発などが進み、若者を中心としたしゃれた遊び場や居住空間として再評価されるようになった。このように社会主義時代に拡大した郊外団地と旧来からの中心部とは、社会主義時代もポスト社会主義時代も、別の意味ではあるが、対照的な位置に置かれていたことが窺える⁴⁰⁾。

この点は、クラクフ郊外にあるノヴァ・フタとも共通している。ノヴァ・フタもクラクフ近郊に建設されたが、それにも共通したイデオロギー的背景があった。クラクフの旧市街がポーランドの長年の歴史を体現し、ブルジョワジーの街、旧体制の街と位置づけられることは、オストラヴァ以上に自明であった。社会主義政権はそれへの対抗としてノヴァ・フタをそこから地理的、社会的、時間的に切り離して建設し、プロレタリアートの街として、社会主義の成果を喧伝する役割を担ったのである⁴¹⁾。このような歴史的経緯から、現在の観光客にとってクラクフ旧市街はポーランドの悠久の歴史を感じられることが魅力であるのに対し、ノヴァ・フタはスターリン時代の生活様式が見られる場であるという差別化ができていたのである。

このように、クラクフ対ノヴァ・フタの対抗関係が、オストラヴァ対ポルバにも見られる。ただし、クラクフとオストラヴァの間では、観光地としての性格が異なる。クラクフは古都であり、旧市街の建築群と製鉄所・その労働者住宅とは水と油の関係とでも呼び得る。それに対し、オストラヴァは19世紀から開発された産業都市であり、富裕層が存在したとはいえ、常に産業都市であった。かつて拙稿で論じたように、現在の観光資源も炭鉱や製鉄所などの産業遺産を主としている⁴²⁾。よって、社会的・空間的差異はクラクフほどではなく、相対的に連続していると言ってよい。他方で産業遺産全体は、19世紀以降のオーストリア帝国からの技術移転と独立期の工業化の象徴とみなされ、ポルバが建設された社会主義期とは時間的な差別化が図られている面もある。ただし、クラクフとノヴァ・フタの間にある断絶・差異に比べれば緩やかなものと言えよう。

さて、ポルバの地図である図1からは、その都市計画の概要が分かる。左右対称、直線的で長い道路、直角に曲がった道、合理的で幾何学的な区画整理、壮大な建築群などがその特徴である。それは設計者による合理的計画に基づいており、20世紀に各地で見られた都市計画の代表例としても位置付けられる。ただし、社会主義リアリズム時代に設計されたため、モダニズムの影響を受けた都市計画の先駆けであるという評価は弱いように感じられる。いわば社会主義体制の成果を誇示するために、合理的に区画された都市である。モダニズムと発想を異にするとはいえ、賢明な建築家による合理的デザインを通じて都市を設計しようとする発想自体、モダニズムとの連続性を見出すこともできる。地図からも、実際に訪問した印象からも、以下に見る過剰な装飾などの点でモダニズムと違いを見出せるものの、都市を一つの機能に従わせようとする発想はモダニズムの“垂種”としての面も有していると言えよう。

旧レーニン通り（現在はHlavní Třída）の公園や元文

化施設（「文化の家」Dům Kultury）など、緑が豊かな公共スペースや労働者が集うための公共施設が確保されている（写真5、6）。前者の大きな公園・広場を設けることは、ノヴァ・フタをはじめ、社会主義の成果を誇示するパレードや行事が行われる場として、当時の社会主義的都市計画の中核に位置づけられていた。アメリカでは資本主義的なカフェやバーなどがコミュニティを支える施設として重視されたのに対抗して、社会主義では“健全な娯楽”の場として上記の公園・大通りや文化施設が重視されたのである⁴³⁾。このように、労働者が一体化した豊かな共同生活を前提に、ポルバの都市計画も策定されていたことを物語る。ただし、ロシア革命当初の「生活の社会化」という理想から見れば、既に公共空間と私的空間は完全に切り離されている。資本主義社会に比べ公共空間は重視されているものの、私的空間を確保する点では、欧米の集合住宅と似てきているとも言える⁴⁴⁾。

写真5などからも、住居棟や広場は規模が大きく、政権側がその巨大さを通じその威厳・威光を示そうとしたことが窺える。広場を軸として左右対称に配置され、高さも均一に揃えられた横長の巨大建築物群は、旧レーニン通りに立って見ると、遠近法によって奥が深く壮大に見える。設計者はこのような視覚効果も計算に入れていたと推察される。この設計は、やはりほかの独裁政権とも共通していると言える。

写真5に写る左右の建築を見ると、ギリシアの列柱そのまま、もしくはそれを単純化した装飾がみられる。それにくわえ、写真7にあるように、アーチ状の凱旋門を思わせるエントランスなど、伝統的様式も織り交ぜている。これらからは古典主義などからの影響を見て取れるとともに、ロシア革命当初のモダニズムや国際様式とは一線を画している。ギリシア・ローマの芸術的伝統が、形態を若干変えつつも、社会主義の威厳・威光を誇示するものとして再利用されているのは皮肉な帰結と言える。為政者にとって、箱型で無装飾のモダニズム・機能主義建築は、社会主義の威厳や威光を示す上で適切ではないと考えたのであろうか。ここでは、伝統的な装飾の美が強調されており、伝統を重視することで社会主義的人間になりきれない人々に美や権威を訴える仕組みになっていたのであろう。

ポルバの代表的建築としてオブロウク（Oblouk）が挙げられる（写真7、8）。これはチェコ語でアーチを意味し、そのアーチや尖塔などに典型的な社会主義リアリズム様式が見られる。サンクト＝ペテルブルクにあるロシア帝国時代の参謀本部からの影響とともに、チェスキー＝クルムロフなどからの影響も見られる。このようにチェコの伝統文化も参照したようである⁴⁵⁾。

建築には社会主義的な労働者や農民、子供の彫刻・銅像（写真5～7）や壁画も見られる。そこでも、このような偶像を通じて社会主義の成果を喧伝しようとしていたことが見て取れる。そのうち、ポルバの壁画にはレリーフやスグラフィト（sgraffito）と呼ばれる技法が使われている（写真9）。特に後者のスグラフィトとは二色以上の漆喰を使って絵を描く、イタリアから欧州全土に広まった手法である。チェコでも有名な伝統建築に使われており、チェコ人にとって伝統的とみなされる技法であった。社会主義リアリズムは社会主義圏を通じて普遍的な様式ではあるが、その

一部では土着の文化を採り入れたチェコ的な変異をとげている。これは、社会主義リアリズムのモットーである「形は民族的、内容は社会主義的（national in form and socialist in content）」という有名なスローガンを地でやっているのである⁴⁶⁾。

このように、ポルバの都市計画はソ連から一方的に輸入され、完全にソ連に従属していたわけではない。社会主義リアリズムが「現地化」された点が強調されている点こそ特筆されよう⁴⁷⁾。本来、社会主義は国際主義的で脱国民国家の思想であったが、スターリン体制下になると、現実には即しナショナリスティックな傾向を帯びる。それに呼応し、民族に関係なく普遍的に成り立たせようとしたモダニズムに代わり、民族的装飾を駆使しながら社会主義にまつわるテーマが描かれるようになった。都市計画や建築の全体像については統一的なスターリン様式から影響を受けざるを得なかったが、他方で細かい建築デザインや装飾などについては、各民族の文化・伝統も取り込んでいった⁴⁸⁾。この特徴はウェブでポルバを説明した文に登場する。たとえば以下の記述を挙げよう。

「しかしながら、建築家は、たとえばその建築のルネサンス・スタイルのスグラフィトや彫像、他の装飾のように、チェコの歴史のモチーフも持ち込もうとしたのである⁴⁹⁾。」

このように、社会主義リアリズムはソ連から強制された建築様式としての顔としてだけではなく、それを土着の文化と適合させようとした部分的対応・抵抗としての側面が、観光資源化や保存をめぐる言説では強調されている。そこでは、先述したブラハの共産主義遺産のように、チェコで長年築かれてきた建築史を断絶させるものとしてではなく、むしろ底流では連続していたことが強調されている。その特徴によって、保全されるべき文化財、観光資源へと転換しようとする構図が読み取れる。ポルバの性格上、ソ連への従属という面を基調とせざるを得ないものの、同様にチェコの抵抗を体現した文化財としても位置づけられるようになっている。

このような視角は、ワルシャワの文化科学宮殿にも見られる。先述の通り、これはポーランド人にとって不快な遺産ではあるが、そこでもポーランド文化の継承という面が強調されている。たとえば以下のような記述もある。

「宮殿の建築デザインはルドネフ（ロシア出身の建築家：引用者）が、二、三挙げると、クラクフ、ザモシチ、ヘウムで見たポーランドの伝統様式に意図的に似せられている⁵⁰⁾。」

ここからも、ロシア人建築家がポーランドの伝統様式も取り込んで建設したという構図が読み取れる。そこには、ポルバ同様、社会主義リアリズムの“土着化”の側面が強調されている。他方で、その土着化もロシア出身建築家が行った点で、アンビバレントな感情もない交ぜになっていよう。

先に、先行研究を引用しつつ、オストラヴァをはじめとする中東欧の都市で、旧市街と社会主義以降の郊外住宅地との対比・対立について言及した。これは住民の属性や各地の再開発に着目した社会学的研究であるが、遺産化や観

光資源化を考える場合、この対比にくわえ、新市街内部の対比も浮かび上がる。それは、1950年代までのスターリン様式の集合住宅群と1960年代以降の集合住宅群との対比である。

スターリン批判以降、スターリン独裁と結びついた社会主義リアリズムも影をひそめる。しかし、民族的伝統も組み込んだこの様式を拒絶した帰結は、当初の思想的支柱を失った官僚主義的なモダニズム“風”建築へと堕していかざるを得なかった。それがチェコスロヴァキアではパネラック（Panelák）と呼ばれたプレファブの均質的な集合住宅群である。自分が住んでいる団地の違いが分からずに別の部屋に行ってしまったというアネクドットが流行したくらい、均質的で没个性的な建築の象徴でもある。これは、良くも悪くもスターリンというカリスマを失い、官僚主義的に運営されていく社会主義体制を建築において体現していた。1960~70年代のパネラックは、強いて言えばモダニズムの延長線上にあるが⁵¹⁾、中東欧圏ではモダニズム建築の評価を貶める存在でもあったという⁵²⁾。

ポルバでは、社会主義リアリズムの建築群周辺にこのパネラックも並んでいるが（写真10）、パンフレットが推奨する観光ルートには含まれていない⁵³⁾。クラクフの共産主義ツアーでは、2つは区別されて紹介されている。たとえばCommunist Deluxeというツアーでは、「ノヴァ・フタ地域」と「真正銘の（authentic）1970年代アパート」の2つが並んでいる。前者については「共産主義を有名にした建築と風景」と銘打たれている一方、後者は「我が国の閉鎖的で変化することのない（our exclusive and unchanged）共産主義アパート」で「1970年代のポーランドの日常を探検」と銘打たれ、社会主義時代の変化のない日常が垣間見ることが謳い文句になっている⁵⁴⁾。観光の言説に着目すれば、後者は変化のない日常生活の象徴であったと言える⁵⁵⁾。

しかし、スターリン批判後も、革命当初の理想には戻れなかったために、公共空間と私的空間が切り離されたスターリン時代の特徴は維持され、もう一つの特徴である過剰な装飾のみが除去された。こうなると、パネラックは、私的空間によってほぼ分断されるとともに⁵⁶⁾、大量建設や費用効率を重視し標準化を推進する世界共通の動きを通じ⁵⁷⁾、欧米や日本の集合住宅に収斂してくることになる。都市部の過密とそれに伴う住宅不足は東西両陣営ともに抱えていた課題であり、その解決策がプレファブで生産された集合住宅の大量建設であった。その意味で、東西両陣営とも共通した課題への対策であり、住民・観光客にとっても、非日常性や異質性を感じることは難しい⁵⁸⁾。また、質は劣化しているものの普遍化・標準化を再び志向しているため、スターリン様式に見られた土着文化の援用も見られない。そのため、観光客にとって非日常化されていないことが観光地化しにくく、それを文化財と見るまなざしが形成されていないと言える⁵⁹⁾。他方、社会主義リアリズムの集合住宅のほうは、独裁体制の成果を誇示するという特徴が、欧米の観光客にとって差異化された非日常の体験に寄与しているのである。

興味深いことに、ポルバの観光資源化はここ10年余りの間に進んでいる。Czepczyńskiによると、1983年の観光地図にはポルバのことは全く書かれておらず、ようやく

2003年に歴史的保存地区になり、2006年になって観光地として取り上げられるようになったという⁶⁰⁾。すなわち、ポルバは観光資源や遺産としての価値が再発見・再認識されたのは、社会主義体制が崩壊して10年以上経ってからなのである。1983年の段階では、スターリン独裁を象徴する社会主義リアリズムの都市は、表立って観光資源化しにくいという事情もあったであろう。この21世紀の変化には、非日常としての共産主義遺産が観光地として再発見・再評価されたことと軌を一にしている。

このような共産主義遺産に価値を見出したのは、主に欧米からの観光客であった。たとえばポルバに対応するノヴァ・フタを巡る「共産主義ツアー」は主に英語で提供され、明らかに主な対象は現地人というより外国人である。これは、ポルバが観光地として載っているパンフレットも英語で書かれていることから、ポルバにも当てはまる⁶¹⁾。ポルバも旧西側世界にずっと生活してきた観光客にこそ、新鮮に映るものであろう。その意味で、オストラヴァ中心部の産業遺産が西欧と同質化させようとしていく中で再評価され、主にチェコ人やポーランド人にとって人気の観光地となっていたのとは対照的である。共産主義遺産、およびそれを使った遺産観光は、外部の人の眼から再発見され、翻ってチェコ人によっても再認識されてきたと言える。当たり前ものを通常文化財とはみなしにくいように、外国人にとって、そして資本主義化したチェコ人にとっても、ポルバの社会主義リアリズムがもはや非日常のものとして認識されはじめたことを反映している。そのような変化が、ポルバを文化財、および観光資源に押し上げた一因と言えよう。

むすびにかえて

これまで中東欧にとって、観光資源化をめぐる社会主義リアリズム建築へのまなざしがいかなるものか、検討してきた。グローバル化が進展する中、国内のみならず、海外の眼からの影響も受ける。外国から来た観光客にとっては特にスターリン時代の遺産のほうが異質で非日常的な存在であり、もちろん、スターリン体制の「罪」が計り知れない規模であることは理性では分かっている、感情面ではその非日常性が観光資源化に貢献してきたことは確かであろう。それに対して、1960年代以降の集合住宅であるパネラックは、現在のところ観光資源になり得ていない。欧米からの観光客にとっては、中東欧はかつて東側ブロックに属していた地域であり、その時代の“異常な”遺産こそ異質な体験として重要である。その点で、20世紀建築のうち、保存対象とみなされるモダニズム建築より、スターリン様式のほうが関心を集めるというのは皮肉な結果である。旧社会主義国の異質性という外側からのまなざしと、その時代を恥部とみなす自国民のまなざしが絡みあいながら、社会主義リアリズム建築を遺産とみなすべきか、論争になってきたのである。前者は欧米から観光客を誘致するための経済的利害として、後者はいわば国民的アイデンティティの問題として位置づけることができよう。そして、前者と後者の間の不協和を緩和した一因が、社会主義リアリズムの「土着化」というレトリックであったとも言える。

このように、ソ連の支配、ソ連への従属という面がありながらも、その土着化の面も強調しながら、観光資源化が

進められた。そこでは、アジア・アフリカ・南米における帝国主義期の遺産と共通する課題が伏在している。すなわち、宗主国からもたらされた異文化の建築や遺産を保全すべきか否か、そしてそれと土着文化との融合（日本で言えば擬洋風建築や帝冠様式など）をどう捉えるかという問題である⁶²⁾。後者は西洋建築のコピーや劣った雑種とみなされ得るものの、他方で被支配社会にとっては、地元の建築家による模倣と工夫が感じられる「創造」のプロセスでもある。社会主義リアリズムも、それらをソ連帝国主義の遺産とみなすか、土着化による一種の抵抗に重きを置くかの選択があった。ポーランド・チェコ国民にとって確かにソ連に支配された1945~89年は屈辱の時代ではあったが、スターリン体制下の社会主義リアリズム建築を、既に非日常的で異質なものとみなし文化財として保存していくことが現在は可能になってきている。ポーランドの文化科学宮殿やノヴァ・フタでもチェコのポルバでも、2つのアンビバレントな歴史観（まなざし）の間を行きつ戻りつしながら、一種の折り合いをつけていると言えよう。

注

- 1) 本研究は、平成25年度静岡文化芸術大学文化政策研究科長特別研究費「旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究」の成果の一部である。
- 2) この用語は、Light, Duncan, "Gazing on Communism: Heritage Tourism and Post-Communist Identities in Germany, Hungary and Romania" in *Tourism Geographies*, Vol.2, No.2, 2000 に従った。
- 3) Tunbridge, J. E. and G. J. Ashworth, *Dissonant Heritage: Management of the Past as a Resource in Conflict*, John Wiley & Sons, 1996, pp.5-6 ; Lowenthal, David, "Fabricating Heritage", in Smith, Laurajane, ed., *Cultural Heritage: Critical Concepts in Media and Cultural Studies*, Vol.3, Routledge, 2007, pp.109-124.
- 4) Tunbridge, J. E., "Whose Heritage? Global Problem, European Nightmare", in Ashworth, G. J. and P. J. Larkham eds., *Building a New Heritage Tourism, Culture and Identity in the New Europe*, Routledge, 1994, pp.127-128 では、"identity versus economy" のジレンマと呼んで、国民のアイデンティティからの要請と観光市場（特に外国人観光客）の需要との相克について言及している。本稿の共産主義遺産もまた国民のアイデンティティと観光産業などの経済的利害とが交錯しあう事例と言える。
- 5) 中国やベトナム、ラオス、北朝鮮など、現在でも共産党やそれに類する政権がまだ支配する国では状況が異なる。Communist heritage tourism と red tourism の違いについては、Caraba, Cosmin Ciprian, "Communist Heritage Tourism and Red Tourism: Concepts, Development and Problem", in *Cinq Continents*, Vol.2, No.1, 2011. ただし、このような国でも red tourism が、ポーランド・チェコとは異なるものの、「正統」の共産主義やその「清貧」と、現実の市場経済やそれに支えられた観光産業・経済開発との間にアンビバレントな関係になっていることは否めない。たとえば、上海の中国共産党第一次全国大会会址とその周辺の新天地とのギャップなどが好例である。
- 6) Light, op. cit., pp.160-162.
- 7) 拙稿「ポーランド・チェコの技術遺産・産業遺産からみた自国史像」『旧東欧地域における産業遺産の保全と利活用に関する研究』報告書』2014年3月所収。
- 8) 中東欧の文化財をめぐるジレンマ・不協和音については、Tunbridge and Ashworth, op. cit., Chapter 6 ("Central Europe: Managing Heritage in the Maelstrom").
- 9) ガルリツキ・アンジェイ（渡辺克義ほか監訳）『ポーランドの高校歴史教科書【現代史】』明石書店、2005年を通読すると、戦後の共産主義化や「スターリン主義化」は否定的に扱われている。
- 10) Berdahl, Daphne, "'(N)Ostalgie' for the Present: Memory, Longing, and East German Things", in *Ethnos*, Vol.64, No.2, 1999 参照。
- 11) Tunbridge and Ashworth, op. cit.
- 12) 特に日本やアジアでは、近代建築というと、開国以降西洋の影響下で建てられた建築群を指し、戦間期以降に採用されるモダニズム建築とは異なる。そこで、「近代建築」という語は誤解をまねきやすい。そのため、本稿ではグロピウスらの建築はモダニズム建築や現代建築とし、近代建築とは呼ばないことにする。
- 13) アジアの近代建築の研究・保全を目的とする mAAN (modern Asian Architecture Network) 「mAAN マカオ宣言」（日本語訳）によると「工業化、都市化、西洋化、植民地化、脱植民地化、そして国家の構築、こうした諸現象に応じてアジアの近代は多様に定義される」と明言している。http://www.m-aan.org/index.php/static/maan_macau_declaration_2011_japanese/ この動きについては、国広ジョージ「Modern Asian Architecture Network as a Vehicle for the Conservation-Revitalization of Built Twentieth-Century Heritage Asia: A Case of the Cultural Public Sphere」, http://www.a-jrc.jp/pdf/qjj/023_030_kunihiro.pdf も参照。
- 14) モダニズムの提唱者の一人であるヴァルター・グロピウスは「個人の自由を強調するわれわれの民主的な文明では、建築家は独裁者的な超人的スケールを楽しんではいけません」（同〔桐敷真次郎訳〕『建築はどうあるべきかーデモクラシーのアポロン』筑摩書房、2013年、209頁）と述べ、モダニズムと独裁者の建築は相容れないとしている。もちろん、グロピウスの意図に反し、独裁とモダニズムの関係はそう簡単に割り切れないことは付け加えておこう。
- 15) それにくわえ、現代建築が立脚する思想も保存との間でジレンマを起こす原因である。現代建築は進歩を尊重し歴史や伝統を拒絶したデザインや、素材を重視した実験的なものが多いため、文化財として長年保存されることを想定していない。そのため、そもそも文化財になること自体を拒否した建築を文化財として保存・保全することには、ジレンマが伴う。この

- 点については、Heynen, Hilde, "Transitoriness of Modern Architecture", in Cunningham, Allen, ed., *Modern Movement Heritage*, Routledge, 1998 を参照。また、現代建築の保存の方法と課題については、ブルードン、テオドル・H・M（玉田浩之編訳）『近代建築保存の技法』鹿島出版会、2012 年も参照。
- 16) Van Oers, Ron, "Introduction to the Programme on Modern Heritages", in UNESCO, *Identification and Documentation of Modern Heritage*, 2003, p.10.
 - 17) 現代建築・モダニズム建築を保存する難しさについては、鈴木博之『現代の建築保存論』王国社、2001 年、18~32, 81~93 頁 ; MacDonald, Susan, "Modern Matters: Breaking the Barriers to Conserving Modern Heritage", The Getty Conservation Institute, 2013, https://www.getty.edu/conservation/publications_resources/newsletter/28_1/modern_matters.html/
 - 18) 以上は、Peacock, Alan, "Towards a Workable Heritage Policy", in Hutter, Michael and Ilde Rizzo, eds., *Economic Perspectives on Cultural Heritage*, Macmillan Press, 1997.
 - 19) Hutter, Michael, "Economic Perspectives on Cultural Heritage: An Introduction", in Hutter and Rizzo, eds., *op. cit.*, p.5; Benhamou, Françoise, "Heritage", in Towse, Ruth, ed., *Handbook of Cultural Economics*, Edward Elgar, 2011, p.256.
 - 20) UNESCO, World Heritage Committee, "Expert Meeting on the "Global Strategy" and Thematic Studies for Representative World Heritage List", 20-22 June, 1994. <http://whc.unesco.org/archive/global94.htm#debut/>
 - 21) Ferkai, András, "Recording and Preserving the Modern Heritage in Hungary", in Cunningham, Allen, ed., *Modern Movement Heritage*, E&FN SPON, 1998, p.44.
 - 22) スジック、ディヤン（五十嵐太郎監修、東郷えりか訳）『巨大建築という欲望：権力者と建築家の 20 世紀』紀伊国屋書店、2007 年、102~105 頁。井上章一『夢と魅惑の全体主義』文春新書、2006 年も参照。
 - 23) 世界共通の普遍的建築を模索したモダニズムに対し、それに土着文化を融合させた建築も保存対象とする動きも見られる。世界文化遺産ではメキシコの「ルイス・バラガン邸」や「メキシコ国立自治大学（UNAM）の中央大学都市キャンパス」がその例である。
 - 24) 以上 2 つの抜粋は、ICOMOS, "Invitation to Participate in ISC20C Project for Conserving Socialist Heritage", 2013, http://www.docomomo.de/attachments/387_B_ICOMOS_20C_LETTER%20Project%20for%20Conserving%20the%20Socialist%20Heritage%20of%20the%20Post-War%20World.pdf
 - 25) 以上 2 つの抜粋は、ICOMOS, "Between Rejection and Appropriation: The Architectural Heritage of Socialism in Central and Eastern Europe", 2012, [http://www.docomomo.de/attachments/316_ICOMOS_GWZO_Progr_12-08-14\[1\].pdf](http://www.docomomo.de/attachments/316_ICOMOS_GWZO_Progr_12-08-14[1].pdf)
 - 26) 革命当初のアヴァンギャルド建築については、八束はじめ『ロシア・アヴァンギャルド建築』株式会社 INAX、1993 年など参照。
 - 27) そのミーティングの概要は、Haspel, Jorg et al., eds., *The Soviet Heritage and European Modernism*, ICOMOS, 2007 参照。
 - 28) "DoCoMoMo Czech", <http://www.docomomo.cz/index/buildings>
 - 29) Smisek, Peter, "Socialist Realism in Czechoslovakian Architecture: Architectural and Urbanistic Principles as Demonstrated in Ostrava's Poruba, with a Side Step to Havířov", p.11. <http://issuu.com/postscripting/docs/historythesisps1.2/>
 - 30) UNESCO, "Tugendhat Villa in Brno", <http://whc.unesco.org/en/list/1052/>
 - 31) 以上は、"Prague Architecture—Guide to Architecture in Prague Part 2", <http://www.private-prague-guide.com/article/prague-architecture2/>
 - 32) 実際は、チェコ建築史の見直しによって、モダニズムは後述する社会主義リアリズムやパネラックにも継承されており、一概に不連続とのみとらえられない。Zarecor, Kimberly Elman, *Manufacturing a Socialist Modernity: Housing in Czechoslovakia, 1945-1960*, University of Pittsburgh Press, 2011. ただし、イメージの点で断絶があるのも確かである。
 - 33) 宗主国的地位にあったロシアでは、スターリン体制の再評価が行われるなど、スターリン様式のアンビバレントな感情は小さいかもしれない。ムラギルディンによると、「この時代の真に平和を愛した世代の奉仕精神と楽天性は、第 2 次世界大戦でのファシズムに対する国民的抵抗を生み、また、戦後大きなダメージを受けた多くの都市を次々と廃墟から復興させ、ソ連邦を 20 世紀の大国といわれる地位にまで引き上げる大きな牽引力となった。今日においても、スターリン・アンピール様式の建造物は、旧ソ連邦の諸都市に印象的なシルエットを残している」とスターリン様式のプラスの側面も強調している（ムラギルディン、リシャット『ロシア建築案内』TOTO 出版、2002 年、24 頁）。
 - 34) 国際産業遺産保存委員会（TICCIH）のニジニタギル憲章によれば、産業遺産の定義には、「居住、宗教、教育などの産業に関連する社会活動に使われる場所」も含まれている。TICCIH, "The Nizhny Tagil Charter for the Industrial Heritage", July 2003.
 - 35) Czepczyński, Mariusz, *Cultural Landscapes of Post-socialist Cities: Representation of Powers and Needs*, Ashgate, 2008, p.92.
 - 36) ノヴァ・フタについてはいくつか研究がある。たとえば Otto, Judith Emily, "Representing Communism: Discourses of Heritage Tourism and Economic

- Regeneration in Nowa Huta, Poland", doctoral dissertation, 2008.
- 37) Haase, Annegret, Annett Steinfuhrer, Sigrun Kabisch, Katrin Grossman, and Ray Hall eds., *Residential Change and Demographic Challenge: The Inner City of East Central Europe in the 21st Century*, Ashgate, 2011, p.129.
 - 38) Czepczyński, *op. cit.*, pp.77-80.
 - 39) Smisek, *op. cit.*, pp.21-23.
 - 40) Haase, et al., eds., *op. cit.*, pp.129-131, 255-276.
 - 41) Otto, *op. cit.*, pp.144-166.
 - 42) 拙稿、前掲論文参照。
 - 43) ノヴァ・フタに関する同様の記述は、Otto, *op. cit.*, pp.68-71, pp.79-86.
 - 44) ロシア構成主義建築の代表と言える Narkomfin を事例に、その中における私的領域と公共領域の変化を追った Buchli, Victor, *An Archaeology of Socialism*, Berg, 1999, pp.77-135 によると、スターリン時代には洗濯・食堂といった共用スペースが後退し、私的空間が拡大した。
 - 45) Smisek, *op. cit.*, p.25.
 - 46) 以上の点については、Zarecor, *op. cit.*, pp.150-173 に詳しい。
 - 47) 社会主義リアリズムには、ソ連様式の模倣という面と、土着文化からの派生という二面性を持っていた。その点については、Zarecor, *op. cit.*, pp.131-134. ポルバでは後者の面が強く、逆に前者の面が強かったプラハのスターリン像は破壊されることになった。
 - 48) ノヴァ・フタに関する同様の記述は、Otto, *op. cit.*, pp.88-89. また中央アジアの社会主義リアリズムでは、建築は現地文化が採り入れられる一方、都市計画全体は合理的な「ソヴィエト的論理」で策定されていたと言う。Castillo, Greg, "Soviet Orientalism: Socialist Realism and Built Tradition", in *TDSR*, Vol.8, No.2, 1997.
 - 49) "Poruba Urban Heritage Zone", <https://www.ostrava.cz/en/turista/co-navstivit/prochazky-ostravou/mestske-pamatkove-zony/>
 - 50) "Warsaw's Landmark: The Palace of Culture and Science", <http://en.poland.gov.pl/Warsaws,landmark,the,Palace,of,Culture,and,Science,11068.html>
 - 51) 社会主義リアリズムもパネル工法による建築の工業化を推進した帰結であり、装飾の有無などを除けばパネル工法と大きな断絶はないと言われる。Zarecor, *op. cit.*, pp.258-264.
 - 52) Ferkai, *op. cit.*, p.45. Lizon, Peter, "East Central Europe: The Unhappy Heritage of Communist Mass Housing", in *Journal of Architectural Education*, Vol.50, No.2, 1996.
 - 53) USE-IT, "Ostrava". USE-IT とは、地元の人々が欧州各都市の若者向け観光地図を作成している非営利のネットワークである。オストラヴァの地図も作られており、若い観光客の「まなざし」を検証する恰好の資料である。
 - 54) クラクフにあった観光パンフレット "Communist Tours®" より引用。
 - 55) パネラックが立ち並ぶことで知られるブラチスラヴァ郊外のペトルジャルカ (Petržalka) について、英語圏のガイドブック *Lonely Planet* は「これらの醜い建物はすべてまったく同一に見える」(Czech & Slovak Republics, 6th edition, Lonely Planet, 2010, p.282) と揶揄している。
 - 56) Buchli, *op. cit.*, pp.137-183.
 - 57) 実際に、1950 年代以降、欧米との情報交換や視察を通じ、パネル工法による集合住宅建設は旧東欧圏に限られるものではなく、世界共通の動きになっていく。その意味で欧米との断絶は小さくなる。Zarecor, *op. cit.*, pp.290-291.
 - 58) 現在、日本では団地建築やその観光が流行りつつある。このような変化が大きくなれば、集合住宅を観光資源化する動きも生まれるかもしれない。世界でも集合住宅を世界文化遺産に登録した事例がある。Haspel, Jörg, "The Heritage of the Berlin Modern Style, Nomination of Housing Estates for Inscription on the UNESCO World Heritage Sites", in Haspel et al., eds., *op. cit.* 参照。これにはブルーノ・タウトの作品という付加価値があるが、当たり前と考えられるようになった集合住宅の先駆として「顕著な普遍的価値」が認められた例である。ただし、一般観光客にとっては単なる住宅にしか見えないうのである。
 - 59) Zarecor, Kimberly Elman and Špačková, Eva, "Czech Paneláks Are Disappearing, but the Housing Estates Remain", in *Architektúra & Urbanizmus*, no.3-4, 2012. この論考にはオストラヴァの集合住宅に関する言及もあり、パネラックの保存が困難な現状を紹介している。
 - 60) Czepczyński, *op. cit.*, p.92.
 - 61) USE-IT "Ostrava".
 - 62) Muramatsu, Shin and Yasushi Zenno, "How to Evaluate, Conserve, and Revitalize Modern Architecture in Asia" in UNESCO World Heritage Centre, *Identification and Documentation of Modern Heritages*, 2003.



写真1 プラハの主要建築：
アドルフ・ロースのヴィラ・ミュラー。筆者撮影。



写真4 ポルバの中心市街。筆者撮影。



写真2 プラハのスターリン様式建築：
クラウン・プラザ・ホテル。筆者撮影。



図1 ポルバの地図

〔出典〕Google Map より作成。



写真3 ワルシャワのスターリン様式建築：
文化科学宮殿。筆者撮影。



写真5 ポルバの中心通り（旧レーニン通り）
からみた風景。筆者撮影。



写真6 ポルバの「文化の家」。

筆者撮影。



写真9 ポルバの集合住宅に見られるスグラフィット。

筆者撮影。



写真7 ポルバにあるオブロウク (Oblouk) のアーチ。

筆者撮影。



写真10 ポルバにあるパネラック。

筆者撮影。



写真8 ポルバにあるオブロウク (Oblouk) の尖塔など。

筆者撮影。